

坂田教授は辞任の理由を説明した。

この間の経緯は朝日新聞に徹底的に叩かれた。これは矢木教授にはひどく応えたようで、飲めなかった酒を飲むようになった。そのためか、「定年(1967年)後には、原研の所長を」という誘いを「適当な理由で断った」とよく話していた。その結果、所長になったのが、原子核実験で知られる菊地正士大阪大学教授であった。

このころ国政レベルでは、自主開発派と技術導入派の正面衝突が表面化した。技術導入派の狙いは、自主開発派の拠点である原研の取潰しであった。具体的には、技術導入に従順な研究者だけを集めて第二原研をつくり、そこに開発の仕事に移して原研を形骸化することであった。第二原研には動力炉・核燃料開発事業団(動燃)が選ばれた。この政策を実行したのが菊地所長であった。これに対し、大部分が自主開発派であった原研の研究者は、職員組合に結集して抵抗した。

このとき労組委員長をしたのが鶴尾昭であったが、この二つの路線の対決といっても、実質は菊地所長と鶴尾委員長の対決である。まだ若い鶴尾にとって、数学者・菊地大麓の息子で国際的著名人、しかも「原子力は超安

全」と信じる菊地所長との一歩も引けない対決の毎日は、耐えがたいストレスの連続であったろう。そのためか急性胃がんを発症し、わずか3カ月で亡くなった。35歳であった。

この原研「改革」で動燃に移ったのは、安定な出世を望む人と従順な人50~60人で、大部分は原研に残った。あるいは残された。特に第1期生はほとんど残った。その一人、佐野川は発電炉ではない小型で超安全な高温ガス試験研究炉を設計・運営したあと、原研理事も務めたが、その彼が、いままで決して言えなかった歴史の真実を書き残しておきたいと私に手紙をくれた。同意を得て以下に転載する。

『私(佐野川)が言いたいことは、今回の福島第一原子力発電所の事故は、地震・津波は天災であるにしても、原発事故は明らかに人災であるということです。建設後40年近く経っていて、その間の原子力の技術開発で改善すべき点が多々あったにもかかわらず、必要な対策も講じないで放置されてきました。このことは、私が原子力研究所に在職していた時代にもわかっていましたが、当時は誰も意見できない雰囲気でした。

しかし、本当のことを貴兄(西村)にお伝えしたいと思いました。福島原発建設当時、日本の技術者は震度9、津波は10メートル以上を主張したにもかかわらず、認められなかったという事実があります。

まず、チェルノブイリとスリーマイル島の原発が、同じくメルトダウンしながら、スリーマイル島のほうは外部への放射線漏れはほとんどありませんでしたが、これは、コンクリート製の分厚い格納容器のあるなしが明暗を分けたものです。この事故の事実を活かすことなく、使用済み燃料プールを原子炉格納容器の外に置いてスレート葺きの建屋の中に置いたことこそ改善すべきなのに、改修費がかかることを理由に無視したまま放置してきたのです。

そもそも福島第一原子力発電所を建設する際、高さ35メートルあった崖を削ってしまいました。そこに原子炉を建て、非常用電源を地下室に設置した結果、15メートルの津波で全電源喪失を招いたのです。つまり、日本の技術者には立派な技術と経験がありながら、残念ながらそれは活かされなかった。それを押しつぶした強大な力がありました。』

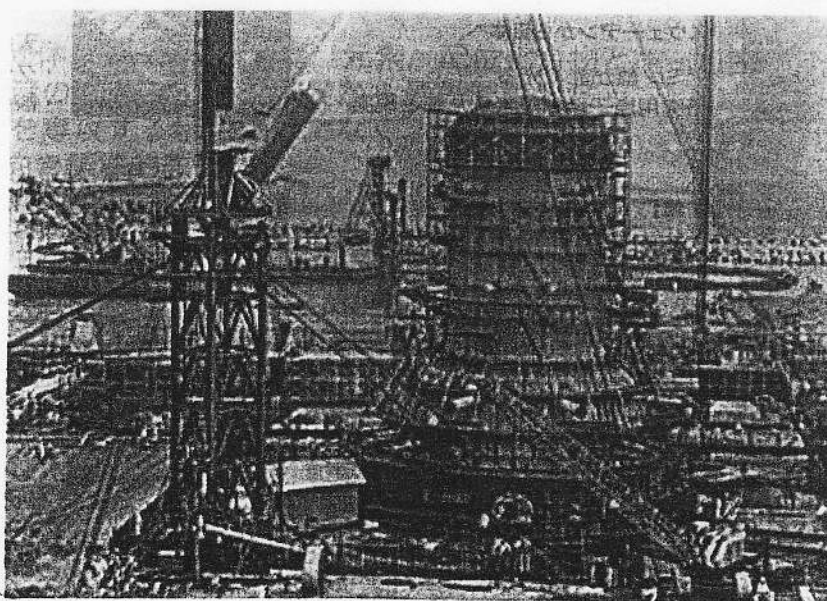


写真3 福島第一原子力発電所1号機の建設当初(1967年)(東京電力のホームページより)